



SINCE 1901 感謝と希望を
日本女子大学・創立100周年

図書館だより

目次

本と向き合うところ	出淵 敬子	1
『今、学生にすすめる本』特集(その7)		
山内 久明	永村 眞	2
今村奈良臣	大沢真知子	
川上 清子	小山 聡子	3
牧野 暢男	吉井 彰	
『ユリノキの蔭で』		
日本女子大学での新井明先生	新見 肇子	4
図書館ぶらり歩き	伊藤 恵理	5
大学図書館	栗田 智未	
日本女子大学図書館へようこそ	田代 陽子	6



本と向き合うところ

出淵 敬子

昨年十一月のある一日、国際基督教大学に新しく開設された図書館のお披露目の会に招かれ、わが図書館より二名が見学に出かけた。紅葉の美しい広いキャンパスの一隅に、旧図書館に寄り添うように地上三階地下二階の新図書館がひっそり静まりかえって建っていた。その建設基金寄贈者の名をとって「ミルドレッド・トップ・オスマー図書館」と命名されたという。

この図書館の大きな特徴は、地下にある自動化書庫である。そこには五十万冊の図書がいくつもの籠のような容れもの(コンテナ)に収納され、コンピューターによる指示に応じて、見たい本がわずか一、二分の間に自動化書庫取り出し口にせり上がってくる。学内の各研究室はコンピューターのネットワークで図書館とつながっているから、人は研究室に居ながらにしてコンピューターの画面で本を選び、注文し、あとは図書館のカウンターに足を運びさえすれば閲覧希望図書が手に入るというわけである。

この自動化書庫を見てきた話を若い友人に話すと、「早く本が出てくるのはすばらしいけれど、書庫の中を歩いて本を探す楽しみはなくなりますね。目的の本を探しに書庫に入っているときに、思いがけず別のよい本を見つけることも多いのですが.....」と言う。確かにその通りである。目指す本が置かれている書架を眺め渡すと、必ず一冊や二冊、あるいはもっと多くの読書欲を刺激する本が見つかることが多い。時には、行きずりに眺めた書架の上に「あ、こんな本がある」と目を見張ることもある。開架式書架ならではの楽しい一瞬だ。自動化書庫では、このような楽しみは失われると思うと、本との交流が半減するようで淋しい。自動化書庫の場合、本のロケーション(図書分類体系に沿った配置)を失っているのだと、たとえば、目指す本の周りに関連図書が並んでいるということがなくなるのである。

もっともこのような考え方には異論もある。関連図書などは、図書館内外に通じるコンピューター・ネットワークによりいくらでも検索できるのだから、自動化により本の出納が速くなるほうが大切である、それに図書の出納にかかる図書館員の労力も減るではないかというものである。このような考え方のほうが、時代の要求に合っているというべきかも知れない。言うまでもなく開架式、自動式いずれにしても、コンピューターによる検索能力が大学図書館を使う者には必須である。

未来の図書館はどう変わっていくのだろう。IT革命の波は大学図書館のみでなく、地域の公共図書館にも押し寄せるとは違いない。しかし、どういう変化が起きようとも、一人一人が一冊ずつの本と向き合い、文字をとおして何かを吸収していくところが図書館であるという基本は変わらないと思われる。

「今、学生にすすめる本」特集（その7）

山内久明（英文学科教授）

大江健三郎著 『死者の奢り』 文芸春秋新社 1958年
『死者の奢り・飼育』 新潮文庫 1987年

1994年ノーベル文学賞受賞が決まった**大江健三郎**は、以後は小説を書かないと宣言したが、事実上『宙返り』（講談社、1999年）、『取り替え子』（講談社、2000年）と二作もの大作を発表した。40年以上、絶えず新しい主題と文体を創出し続けて来た大江文学の原点は、大学在学中に発表した作品に遡る。「死者の奢り」をタイトルとして、ほかに「飼育」、「人間の羊」など七篇が一冊となって1958年に刊行されると、芥川賞を受賞。「監禁されている状態、閉ざされた壁のなかに生きる状態」という安部公房やカフカに通底する主題は、少年として敗戦を迎え平和憲法と戦後民主主義を教えられながら、朝鮮戦争を経て冷戦下で核の傘と米軍基地の存在を身近に感じ、戦後の貧困の延長のなかで生きていた若者の実存的不安を、喚起力豊かなみずみずしいイメージで表現している。40年を経て世界も日本も様変わりしたが、大江の初期作品は当時の作者と同年齢の学生の感受性に訴えるはずである。

永村 眞（史学科教授）

藤井忠俊著 『兵たちの戦争 手紙・日記・体験記を読み解く』 朝日新聞社 2000年

今わたし達の周辺に、第二次世界大戦の記憶をもつ人々は、いづいづと少なくなった。戦場におもむき空襲を経験した人々は七十年代に、かつての「皇国少年」達も六十代となり、若い世代にとって「戦争」はいまや知識の範囲をこえない。老齡の父が南方の戦場で罹ったマラリヤを再発させた時、戦後生まれの私は初めて戦争を身近に感じたものである。しかしわずか半世紀余をへだてた日本で、「戦争」はあまりに日常的であった。わたし達の父が祖父が、戦争の中で書き記した数多くの記録のわずか一部が、活字化され日の目を見た。庶民たちが「兵」として戦場でこのした記録（「手紙・日記・体験記」）は、日常に同居していた戦争の悲惨さをこどもなげに語る。この記録を読み解きながら、筆者の藤井忠俊氏は、「戦死はあわれ／兵の死ぬるや あわれ／遠い他国で ひょんと死ぬるや」という語り口で、「兵」の心に隠れる日本近代の一面を物静かに問い直している。

今村 奈良臣（家政経済学科教授）

自分の背丈ほどこの1年間で本を読んでみよう

どんな本を読むべきか、他人から教わるものではない、と私はこれまで考え、かつ実行してきた。若いときには要するに手当たり次第読んでみることだ。そこで、特に新一年生に提案したいのだが、せめてこの1年間に、平積みで、自分の背の高さだけの本を読んでみませんか。もちろん週刊誌などの雑誌やマンガを除き、教科書も除いてです。単行本はもちろん、新書や文庫でもかまわない。難しい所や判らない所とはばしてもよいが必ず読み上げることです。要するに、私の言いたいことは、乱読のすすめです。乱読する中から、自分なりの理念や理論、そして人間形成ができるものと信じます。もちろん片寄った本だけではだめで、できるだけ広く読む。そして、本を通じて友達を作っていくことです。色々本を通じて意見交換ができます。大学生活の最も大切なことです。

大沢 真知子（現代社会学科教授）

坂田静子著 『聞いてください』 坂田悠子発行 1999年

東海村の原子力発電所の事故は私たちに大きな衝撃を与えました。原子力発電は本当に安全なのか。本書は今から20年以上も前に、ある出来事から原発の安全性に疑問をもった主婦がガリ版刷りの新聞を発行。地元長野県須坂市から日本の原子力政策の転換を訴え続けた記録です。最近では専業主婦になるか働くかをめぐって論争もありますが、どちらの選択をするにせよ、次世代を育てる私たちが地球環境を守り、次の世代にそれを引き継いでゆく責任があるのだと、あらためて考えさせられました。

著者の坂田静子さんはもうこの世になく、本書は遺族によって編まれた遺稿集です。本書は一般には入手できないので、目白と生田の図書館にそれぞれ寄贈しました。関心のある方は図書館で借りて読んでみて下さい。

川上清子 (児童学科助教授)

斉藤淑子・坂上和子著 『病院で子どもが輝いた日』 あけび書房 1995年

「ひろがれ! 病院内保育」という副題のついた本書は、3章から成っています。第1章は生後8カ月で発病し3年半にわたる小児がんとの闘いの末、4歳2カ月の短い生涯を閉じた“ゆっくん”のお母さん、斉藤さん(現在小児病院内の分教室の教員)による闘病記録です。第2章は、斉藤さんを陰で支えた人々のひとりである坂上さんが、“ゆっくん”の死後、はからずも天命とも感じられる仕事 在宅訪問指導員に就くことになり、彼の入院先でもあった国立国際医療センターにおいて、保育を担当した入院児たちとの交流の様子を紹介したものです。第3章は座談会形式をとり、このお二人を中心に、難病と闘う子どもたちこそ保育が必要であることを訴え、真のQOLとは何かを問いかけています。病気子どもたちは、まず病を治すことが第一であり、教育、ましてや保育など不要であると考えている人がほとんどでしょう。しかしながら子どもたちは“保育を通して遊ぶこと”ができれば、苦い薬も痛い注射も頑張れるのです。子どもたちにとって“遊んでもらう”ことが、どんな薬よりも効く場合があるということをお私たちに教えてくれる本です。

小山聡子 (社会福祉学科講師)

安積遊歩著 『癒しのセクシー・トリップ』 太郎次郎社 1993年

タイトルからしてちょっと読みたい感じがするでしょう? この本は先天性の骨形成不全という障害を持つ筆者が半生を振り返り、自己内対話をした本、つまり様々なことに気付き自由になってゆく過程を記した本です。「障害を乗り越え」「明るく頑張る」感動の物語なんかではないので念のため。皆さんが女性として人間として学ぶこの4年間はとても大きいと思う。この先何になりたい? 結婚はしてるの、したいの? なぜ? 子どもは産みたい? なぜ? まわりの人々に気に入られたくて違う自分を演じることはない? 本当のあなたは誰? 今の自分が大好きだと思える? 障害があるために、この私達が住んでいる「社会自体」のかかえる矛盾を、より先鋭な形でつきつけられ、それと向き合わざるを得なかった筆者の心の旅がここにあります。たった一人の、皆さんにすれば「特殊な」人の語りの中から、思いがけず今の社会における自分自身の位置がかい間見えるかもよ。

牧野暢男 (教育学科教授)

E・フロム著 日高六郎訳 『自由からの逃走』 東京創元社 1951年

人間と社会がどのように関わり合うかを解明することは、社会学の基本的なテーマである。私はこの本を学生時代に読み、心から驚嘆したことを覚えている。この本のなかでは、人間の社会的性格と社会経済的条件、そしてイデオロギーという三者のからみ合いにおいて、ナチズムが台頭した歴史的状況が見事に描かれ、同時に、自由というもののもつ意味が鋭く問われている。フロムは、いわば社会派の精神分析学者として、他にも『人間における自由』『正気の社会』など多くの著書を著しているが、その人間と社会への鋭い洞察力と分析力には学ぶべきものが多い。それは今日の人間と社会を考える際にも非常に示唆的である。フロムの著作を代表する名著であり、もはや古典ともいえる本でもあるが、学生に是非一読をすすめたい本の一冊である。

吉井彰 (数物科学科教授)

立花隆他著 『新世紀デジタル講義』 新潮社 2000年

21世紀の情報化社会に生きる我々にとって、単にコンピュータの操作ができるだけでなく、情報に関する基本的知識を身に付けておくことは必要な教養の一つである。このような観点から、本書は情報やコンピュータの説明からデジタル産業革命、ネットワーク社会の今後の展開まで、著者たちの講義をまとめたもので、面白く読むことができる本である。

ジャレド・ダイヤモンド著・倉骨彰訳 『銃・病原菌・鉄(上・下)』 草思社 2000年

地球上には21世紀を迎えた今日、60億を超える様々な人種の人間が住んでいる。その中にはロケットを飛ばし宇宙に人を送っているところもあれば、つい最近まで石器を使い狩猟採集の生活を送っていた人種もある。1万数千年前には同じであった人類にこのような差が生じてきた原因は何だったのであろうか。本書はこのような疑問に考古学、生物学、言語学などを駆使し科学的に答えようとするものであり、人類の発展と言うことを考えさせられる本である。

『ユリノキの蔭で』 日本女子大学での新井明先生

新見 肇 子



先輩の先生方がご定年で女子大を去られる時、後に残されるものは言い知れない不安と寂寥感を覚えるのが常である。2000年3月新井先生がお辞めになることが、いよいよ1年後に迫ると、大学はもとより英文学科のことを大所高所から見渡し、支えてくださっていた新井明先生の存在は大きく、先生を欠いた女子大はどうなるのかという思いで心細さが募るばかりだった。折りしも、大綱化によるカリキュラムの大幅な見直しや少子化による大学生人口の減少を初めとして、大学の存在基盤を根底から問い直さざるを得ない内外の厳しい状況が女子大にも迫っていたのである。しかし少し冷静さを取り戻し、19年にわたる先生の本学へのご貢献に、少しでも我々の感謝の気持ちを表わしたいとの念がわき、弱気を振り払い、イギリス文学担当の教員たちが学科の代表として先生のもとへうかがった。

先生には、ミルトン研究を中心としてイギリス文学・文化に関する多くのご著書、ご翻訳がおりになる。ご退職記念出版には、先生が女子大で語り、書いてこられたものと卒業生の結婚式や別離の宴で訳して贈呈された詩を本におまとめいただき、その出版のお手伝いをさせていただきたいとの我々の希望をお伝えした。先生はこれを承諾してくださったが、日頃から出版物や書類を完璧に整理されている先生は、編集に関しては我々に微塵だに負担をおかけになることなく、大部な『ユリノキの蔭で』を開成出版より上梓された(2000年3月)。しかし、後藤久教授の手になる美しい装丁の本著は決して気軽に書かれた随筆や講演録の集成ではなく、示唆に富んだずっしりとした手応えのある本である。内容の豊かさとそのを貫いている詩人、キリスト者としての先生のご心情やご意見は、大学、教育、成瀬仁蔵、学生、自然、文学について関心をもつどのような読者にも指針や助言を、また時に喜びを与えてくれる。

第一部『日本女子大学総合研究所ニュース』および『同紀要』、『女子大通信』、『歌舞伎研究会パンフ』、『目白会だより』、英文学専攻発行の *Veritas Letter* や英文学科の研究誌 *Symposium* などに掲載されたエッセイや講演の記録からなる。主題は多岐にわたるが、全学的視野から女子大の教育、運営に積極的に取り組まれた先生のご活躍ぶりとは漢洋にわたる深いご学識が窺える文章に感銘を受けると同時に、時に文明社会批判にもなる、徹底したりべラル・アーツ教育の擁護には、大いに勇気づけられる。「女子大学文学部」には人文的教養に関する先生の持論が簡潔にまとめられており、講演録「共に生きる」や「文芸と自然」では山を愛される先生の彼我的自然観についてのお考えを、また、「西の詩・東の詩」では詩の読み方を、「成瀬仁蔵著『沢山保羅 現代日本のパウロ』の成立をめぐって」や「晩年の成瀬仁蔵先生 平和を求めた教育者」においては本学の歴史と伝統の意味の問い直しを、「『上代たの文集』の編集 裏方の弁」では、優れた業績に対する威儀を正した態度を披瀝されている。先生が日頃学生の心身の健康に心を砕かれ、学科内、また全学的な教職員の和の形成に努力されていたことを知る者にとって、あらためて先生の思想と行動がリベラル・アーツに基づいた開かれた教育者、研究者のそれであることを思い知らされる。

第二部は、折に触れて先生が翻訳された96篇から成る『軽塵抄』と名づけられた訳詩集である。前期ロマン派から現代詩人まで、68人の英米詩人の作品を取り上げられている幅広い涉獵ぶりに驚嘆させられる。女性詩人も多い。またいわゆる一流詩人ばかりでなく、あまり読まれない詩人たちも選ばれている。日本語の詩集として読んでも、一冊の高雅なアンソロジーである。贈られる相手の性格をよく知り、将来を暖かく見守るような作品を選び、心をこめて訳されているからだろう。

本書からも窺い知れる先生の女子大における多大のご努力とご苦勞に改めて感謝の念を禁じえない。しかし、そのようなことを申しあげても、先生はまるで何事もなかったかのように、次の目標に向かってもう新たな一歩を踏み出されているのだ。
(英文学科教授)

図書館ぶらり歩き

伊藤 恵理

私は何の目的もなく、図書館で本棚を眺めてぶらぶらと歩くことが好きだ。あの落ち着いた雰囲気、ひしめきあい整列する膨大な本、二秒以上押さないとつかない電気スタンド、どれもこれも好きである。その中を歩いていると、必ず自分の興味をひく本を見つける。そうしてうれしくて、ついニンマリと口元がゆるむのである。

その図書館というのは大学機関の一つであるが、一体どのような存在なのだろう。それは大学にとって空気のようなものだと私は思う。当たり前のように私達の生活にあるが、無ければ生きていけない、つまり大学として成り立たないと思う。課題の調べものや自習の場として資料、学術書の豊富な図書館は勉学の面からみて、大学と切り離すことのできないものなのだ。

しかし、図書館は勉学以外にもっとおもしろい発見がたくさんあると思う。一つ例に挙げれば、館内には古書から新書まで幅広く存置しており、古い書物は徹底的に古い。大正、明治時代のものや夏目漱石著、と書かれた色あせた書物も現代書の隣にさりげなくある。私はある日それらを見つけたとき、身震いがおきた。いい意味で、である。人間の歴史そのものがこの図書館という空間に凝縮されているんだと実感した。約百年前の人々の考え、暮らし、思いなどが手を伸ばせばすぐそこに当時のままあるのだ。それは本を読むというより人間観察をしているようで私には興味深かった。そしてその蓄積された知恵を活用すべきだとも思う。自ら活用すればいくらでも本の中の人々は答えてくれる。

図書館の使い道は人それぞれだが、一度、目的無しに本を眺めてはいかがだろうか。きっと新たな図書館の一面を発見できるだろう。
(英文学科1年次学生)

大学図書館

栗田 智未

今、私にとって図書館とはとても大切な場所です。私のもうひとつの勉強部屋でもあり、“楽しむ場”でもあるのです。でも、はじめはそのことに気が付きませんでした。

大学の入学と同時に図書館を案内してもらった機会がありましたが、その当時は自分自身が図書館を利用するなんてこれからどれくらいあるのだろうか、と思っているくらいでした。いざ、授業が始まり、キャンパスに通うようになると、私はほぼ毎日、図書館に足を運んでいるのです。記念すべき大学図書館の初利用は、授業のレポートを作成するための文献探しでした。探している分野の本が配架されているところを歩きながら探し、必要な箇所載っている本を見つけ借りました。そのうちにキーワードを入力しただけで自分の目的に合ったさまざまな本を一目で見つけることができる、OPACを用いた本の検索の仕方を知り、とても驚きました。

このように、はじめのころは授業のために、レポートのためにといった目的の利用でしかありませんでした。図書館へ通い続けるうちに本だけでなく、新聞や情報誌などのような雑誌類も豊富に取り揃えられていること、最新号の雑誌はもちろん数年前のものまで、バックナンバーがあることを知りました。これは、私を図書館へ向かわせるもうひとつの理由となりました。少し前までは情報誌に読みふけていましたが、今は、1階の論文集や大会発表論文集、他大学の紀要などを読むのがとても楽しみです。

図書館に通い続けて、私は自分なりの図書館の利用法を広げていっているように思います。そして私が気付いた図書館の持つ効用は、自分にとって新しい世界を知る手がかり・扉になるということです。さまざまな扉を開けて触れて、知らないことを識るといった喜びが味わえると思うのです。

(心理学科3年次学生)

日本女子大学図書館へようこそ

あなたはどんな時に本学の図書館にいらしていますか？試験対策やレポート作成や発表準備など、学習や研究をする時ですか？もちろんそんな時には、いの一にお越しください。でもその時ばかりになっていませんか？求めている資料まで、なかなかたどり着けないでいませんか？このコーナーでは新入生はもちろん、まだ本学の図書館をあまり利用していないというあなたに、もっともっと利用していただくために、簡単なお案内をいたしますね。いつもいらしているあなたも、目を通してみて！利用の仕方が広がれば幸いです。

はじめに

図書館は、目白のキャンパスにも西生田のキャンパスにもあります。本学の学生・教職員・卒業生・その他の方にも、利用資格をお持ちの方ならば両方の図書館を使えます。新入生に4月始めに配布される利用案内のパンフレットは、館内にも配置され自由にお取りいただけます。また、利用のしかた等、質問がありましたら、カウンターで直接お尋ねください。

『図書館のしおり 目白版』と『図書館のしおり 西生田版』が両方の図書館においてあります。



この他次の利用案内が、目白と西生田にあります。

【目白用利用案内】

- 『日本女子大学図書館利用案内 目白貸出と西生田相互利用』
- 『 “ 図書の探し方 ” 』
- 『 “ 雑誌と1階施設 ” 』
- 『 “ レファレンス・サービス（参考係） ” 』

【西生田用利用案内】

- 『日本女子大学西生田図書館利用案内 1貸出・施設・目白の図書館の利用』
- 『 “ 2 図書の探し方 ” 』
- 『 “ 2 - 2 図書のさがし方 ” 』
- 『 “ 3 逐次刊行物とAVコーナー ” 』
- 『 “ 4 参考係（レファレンス・サービス） ” 』

入館にあたり

飲み物・食べ物の持ち込みはお断りします。

携帯電話の電源は切りましょう。

なお、目白では13cm × 19cm以上の、バッグ等の袋物は持ち込めません。必要な物だけを取り出して、ロッカーをご利用ください。

図書館にある施設

ブラウジング・コーナー：入口のすぐ近くの所で、新聞（当日朝刊と前日夕刊、外国語の新聞も）や情報誌（最新号、例えば『ぴあ』など）があります。

共同研究室（目白）／グループ研究室（西生田）

：図書館資料を使って、グループで学習・研究するための部屋です。カウンターで利用の申し込みをしてください。

AVコーナー：ビデオ、カセットテープ、CDなどの図書館資料および持参資料の再生が出来ます。ダビングは出来ません。カウンターで利用の申し込みをしてください。

マイクロ・リーダープリンター：マイクロ資料の閲覧とプリントアウト（一枚10円）が出来ます。カウンターで利用の申し込みをしてください。

利用カードの交付

もうお手元に図書館の利用カードをお持ちですか？貸出、予約、目白・西生田図書館間の資料の取り寄せ等には、利用カードが必要です。新入生の方は、オリエンテーションの時に記入済みの登録票を回収しています。学生証を持って、カウンターで交付の手続きをしてください。オリエンテーションの時に未提出の方やその他の方は、カウンターに来て登録票にご記入ください。利用カードは両方の図書館で使用でき、本人のみ有効です。

閲覧・OPAC

館内の書架へ自由に行って資料をご覧ください。貴重書やAV資料など一部の資料は、館員が出納しますのでカウンターへ申し出てください。

資料は性質や形態によって配置されています。同じ主題の資料が集まるように分類されて、分類番号(000～999, 小数点以下が付くこともあります)が付いています。次に図書記号(Nih等のアルファベット)が付き、資料によっては巻号等がさらに付きます。これらの数字・アルファベットを合わせて請求記号といいます。図書館の資料はすべて請求記号順に書架の左から右へ並んでいます。

探している資料が本学に(図書館に限らず研究室等の場合もあります)所蔵されているかどうか、所蔵されている場合はその配架場所(どちらの図書館か・どこの研究室か・請求記号は何か)はどこかなど、正確に知るには目録で調べることが必要です。目録はOPAC(Online Public Access Catalog, コンピュータ検索)とカード目録の2種類があり、本学の全蔵書を調べることが出来ます。OPACはPC(パソコン)とVT(専用端末)の2種類を設置しています。

OPACで探せる資料は以下のとおりです。

- ・西生田地区の全蔵書
- ・目白地区の蔵書の1990年4月以降受入のもの
(それ以前に受入の蔵書については順次データ入力中)
および全洋雑誌。



OPACで探している資料が見つからない場合、目白ではカード目録をひいてください。西生田では参考係へ申し出てください。目白で所蔵しているかどうか調べます。

カード目録は、1990年3月以前受入のものは書名・著者名から探せます。カード目録ケースは和書・洋書別に配置されています。

OPACのPC(パソコン)では、インターネットの本学図書館ホームページが見られます。メニューの「蔵書検索」で、本学の所蔵資料が探せます。操作方法等、質問がありましたらカウンターへお尋ねください。(アドレスは <http://www.lib.jwu.ac.jp> です。)

なお、図書館で開催するOPAC講習会がありますのでぜひご参加ください。開催日や受講申込方法は、掲示等で公表します。その他随時説明をいたしますので、お尋ねください。

取り寄せ

目白図書館の資料を西生田図書館へ、西生田図書館の資料を目白図書館へと、取り寄せることができます。(図書館の資料のみで、研究室等の資料はできません。)通常、週に2回の学内便で配送しています。利用カードを持ってカウンターで用紙に記入をお願いします。貸出中であれば、予約の手続きをしてください。用紙にはその資料の請求記号と図書ID番号(8桁の番号です)の記入が必要です。予めOPACでお調べください。取りおき期間は到着日から3日間です。

資料到着後は、掲示板に貼られている該当の紙を取ってカウンターに持参ください。

貸出・返却

図書の貸出は、図書と利用カードをカウンターまでお持ちください。貸出冊数や期間は掲示等で確認してください。学部学生の方は雑誌の貸出は出来ません。取り寄せした資料も同様です。

図書の返却は、開館時間中はカウンター返却台に置いてください。閉館時には、返却ポストに入れてください。取り寄せした資料も同様です。

延滞罰則

貸出した図書の返却が遅れる（返却期限日を過ぎる）と、新たな貸出は出来ません。冊数に関わりなく、延滞した日数分だけ貸出停止になります。ご注意ください。貸出停止中は、取り寄せした資料・予約した資料は、館内での利用に限ります。

継続

貸出の図書を引き続き借りるには、返却期限までに図書と利用カードを持ってカウンターで手続きをしてください。電話による申し込みは受け付けません。予約がついている場合や返却期限を過ぎている場合は継続できません。取り寄せした資料も同様です。

予約

貸出中の図書（OPACに返却期限とともに表示）の予約が出来ます。カウンターへお申し出ください。



複写

館内に複写機を設置しています。セルフサービスです。（一枚10円）

図書館では両替はできませんので予め小銭をご用意ください。専用のコピーカードが使えます。館内に設置している券売機でお求めください。

図書館での複写は、著作権法上、図書館の資料に限り可能でノートコピー等はできません。

また画面プリントアウトは、OPACなどの検索結果に限り受け付けています。（一枚10円）検索画面はそのままにして、カウンターへお申し出ください。プリントアウトした枚数分の証紙を買って来ていただき、その証紙と引き換えにコピーをお渡しします。

探している資料が学内に無い場合

参考係へお尋ねください。購入希望の受付、他大学図書館・専門諸機関での閲覧、郵送による文献複写の取り寄せ、図書館の相互貸借制度の利用など、資料の入手方法を考えて援助します。

どうぞたくさん図書館を利用して、あなたの知的世界をより豊かにお拓げください。

お役に立てるよう館員一同日々努めております。ではまた図書館でお会いしましょう。

（館員・閲覧係 田代陽子）

編集後記 図書館ホームページのOnline Journalの中にも、図書館だよりを掲載しています。No.102からはPDF版です。巻頭のカットは、目白の図書館で勤務している吉井美奈さんによる。利用者の方がよく通る館内のスケッチです。どこがおわかりになりますか？新入生の皆さん、ぶらりと図書館に寄って、書架の間を歩いてみてくださいね。図書館だより編集委員：田口令子，中島和子，陸川享子，田代陽子，中澤恵子（田口）